

## 第 44 回 日本カトリック映画賞 対談

日時：2020年7月4日 14:00～14:30

場所：カトリック浅草教会

晴佐久神父：それでは、ただいまから、第 44 回日本カトリック映画賞、『こどもしょくどう』を監督なさった日向寺監督と、私、東京教区司祭晴佐久神父の対談をさせていただきます。コロナの時代ということで本当でしたら大勢の観客の前で対談ができたならよかったですけれども、残念ながら、今日はスタッフ、その他、熱烈な日向寺ファン、晴佐久の話を聞いてやろうという人、などなど、何人かが集まっています、こんな状況ですけど、ここで対談をさせていただきたいと思います。日向寺監督、よろしくお願ひいたします。

日向寺監督：よろしくお願ひします。

晴佐久神父：いい環境でしょう。

監督：そうですね。

神父：浅草教会のこれがご自慢の庭なんですけども、ここで日向寺監督と、こうして対談できるのを楽しみにしておりました。一番最初に、監督のこの映画に対する思い、「なぜ、この映画を作ろうと思われたか」、その辺のきっかけとか、ちょっと聞かせていただければと思います。



監督：はい。結構前に<sup>さかのぼ</sup>るんですけど、2015年のことですが、始まりは。私は、デビュー作からずっとお世話になっている、鈴木ワタルさん、というプロデューサーがいて、1本の映画が公開まで終わると、次何を映画にしたいか、企画の相談に行くというのが習慣になっていたんですね。

この『こどもしょくどう』の時にも、その前の映画の公開が終わって、一段落ついて、私は3冊原作を、どれかできたらいいかな、と思ったのを持って行ったんです。もちろん、それは事前に読んでいただいていた。

その時に、そのプロデューサーの鈴木さんは、この中の1本は面白いかも知れない、と。ただし、これはまだ先でもできるし、今やるんだったら「子ども食堂」を映画にしませんか、という提案をいただいたんです。それで、今では「子ども食堂」って、多くの方が知っていると思うんですけど、2015年当時というのは、テレビのニュースとか新聞でちょっとずつ取り上げられ始めた、という段階だったんですね。ですから、知っている人は知っている、まだ知らない人も大勢いた、という段階でした。それで、私は企画によっては、ドキュメンタリーも撮ることがあるので、実際に「子ども食堂」があるっていうのは、ニュースや新聞記事で知っていたので、これはドキュメンタリーの企画の提案だな、と早合点したわけです。

神父：はい、はい。

監督：それで、ドキュメンタリーだとすると、もちろん、大まかにしか「子ども食堂」のことを知りませんでしたけれど、これは難しいんじゃないか、と思ったんです。というのは、何でか、と言いますと、そ

これは、そこに来る子どもたちの内面にどこまで入れるか、ということがないと、こういう「子ども食堂」っていうものができて、こういうことをしていますよ、っていう、情報が主になってしまう。というふうに思ったんですね。そうすると、映画としては、難しいんじゃないか、と思ったんですが、それは私の早とちりで、そうではなくて、「子ども食堂」をモチーフにしたフィクション、劇映画としてやりましょうよ、という提案だったんです。そうすると、その子どもたちの内面を描くのも自由に作れますので、ああ、これは面白いんじゃないか、というふうに即座に思いました。「是非やりたいです」というふうにお話したのがきっかけです。

神父：でも、そういうふうに話が来ると、じゃあ、どんな劇映画にしようか、といった時に、まあ、「子ども食堂」で奮闘する大人たちと、変な言い方“かわいそうな子どもたち”、その子どもたちが救われてよかったね、みたいな、大人目線の映画を普通考えてしまうじゃないですか。それが、この映画観た方にはもうおわかりでしょうけれど、“こどもの視点”、“こどものまなざし”で、こどもがどう感じて、その当事者が、どのように動いていくか、っていうそのテーマというか、そういう映画になさった、それは最初からそう思われた？どこかでそう気づかれた？

監督：いくつか要素があると思うんですけど、まずひとつは、運営されている方たち、要は大人を主人公にする、と。私は「子ども食堂」を運営されている方たちに敬意を持っていますし、非常にいいことされていると思うんです。しかし、それだと、“いい人たちの話”で終わってしまうというか、そのこと自体意味があるんですけど、ドラマとしてどうなんだろうかと。せっかくフィクションで作るっていう時に、それでいいだろうか、っていうことがひとつあったんですね。それで、この脚本を書かれたのが、足立紳さん、という方なんですけれど、足立さんと、そのプロデューサーの鈴木さんと三人で話し合いながら、じゃあ、どういう話がいいんだろうかと。でも、まずは、実際にある「子ども食堂」に行ってみよう、っていうことになったんです。それで、大田区にある「子ども食堂」、最初に作られた近藤さんという方がやられている、『だんだん』というところに行ったんですね。私は、最初は取材だってことじゃなくて、大人も入れるので、一人の客として行ってみたんです。どういう雰囲気なんだろうかと、ということで、行ってみて。二回目に脚本の足立さんと一緒にお話を聴きに行ったんですね。近藤さんはいろんな質問に多分何十回も何百回も答えられていると思うんですけど、私もそれは知っていたんですけど、改めて直接お聴きしようと思って、「なぜ、子ども食堂を始められたのか」ということを、聞いたわけです。そうしましたら、「近くに小学校があって、その小学校に関わっている人から聞いた話によると、一日に食べる食事が給食で出るものだけだったり、あるいは、バナナ 1 本だけしか一日に食べていない子どもがいる」ということを聞いて、それを何とかしなきゃいけない、ということから始められた、っていうことをお聴きしたんですね。その時に、「じゃあ今、子どもたちから今この世界を見たらどうなるんだろうか」、ということを描きたいなあ、と思ったわけです。

神父：はいはい。

監督：そしてもう一つは、まだこれは作りながら考えたこともあるんですが、そういう子どもたちの思いが、大人たちに子ども食堂を作らせた、っていうような映画にできたらいいんじゃないか、というのが話し合っ出てきた方向なんです。

神父：はい。そこがこの映画観てて、ホントいいなあって、最後余韻がととも残ったのが、その『こどもしょくどう』ってタイトルの映画観に行ったら、じゃあ、「子ども食堂」どんなふうに、苦労しながら、運営してるか、みたいなものをなんとなく想像して行く人が、きっと多いだろうと思うんだけど、実際

には、最後の瞬間、「子ども食堂」が出てきて終わる、という。あ、なるほど、「子ども食堂」って、何かこう立派な活動の話じゃなくて、それをせざるを得ない大人の思い、その子どもたちとの出会い、その前提があって、その最後の実りが、「子ども食堂」ってということだろうけど、その前提がちゃんとあれば、この世界すごくよくなっていくんだよね、っていうことが、あの映画を観て最後の「子ども食堂」が実る、「始まる」。じゃあ、私たちも何を始めたらいいいんだろう、っていうそんな思いにさせられた。なんか最後に『こどもしょくどう』のタイトルが出てきて、なんでひらがななんだろうな、と思っていたら、それが最後に全部が一つになって、あ、自分たちもやっていこう、っていう気持ちにさせられた。そこは本当にすばらしかったなあ、と思って感心いたしました。

監督：そう言っていただけるとうれしいです。

神父：最後はやっぱり、「子ども食堂」が始まる、というあのシーンで終わらせる、っていう、最初からそういうふうにして？

監督：はい、あのそれも、話し合いながら決めていったことなんですけれど、『こどもしょくどう』っていうタイトルで、「子ども食堂」が舞台になっている映画だろう、って観に来られた方たちには、ちょっと肩すかしになっている面もあるかと思うんですけれど、先ほどの、最初に「子ども食堂」を始められた近藤さんのお話を聞いてて、やはり、どうして子ども食堂を作ろうと思ったのか、その立ち上げるエネルギーっていうんでしょうかね、大人側から言えばそうですし、それと同時に、子どもたちの思いが、この映画の中での話ですけれども、子どもたちの思いが大人たちを動かした、っていうようにしたかったので、やはり、ものごとが立ち上がる時の思いだったり、エネルギーを描くことが、今の世界の、根本を描くことになるんじゃないか、っていうように思ったんです。

神父：やっぱり、その大人たちの思いを動かす子どもの、ありきたりな言い方でいうと純真さになるんだろうけど、そんな子どもたちの中でも純真とばかり言われてられない戸惑いがあり、それを超えていく成長があり、子どもたちを主人公にした子どもたちのまなざしの映画を撮るとするのは大人たちを撮るより難しくなかったですか？

監督：実際の現場は難しかったです。ちょっと一つだけお話ししたいのは 私の間観というか、子どもでも大人でもそうなんですけど、全部が全部いい人間とか、全部が悪い人間がないというのが私の人間観なんです。一人の人間の中にいい部分、善人の部分もあれば悪人の部分もあって、先ほど一番最初にお話ししたことに戻りますが、子ども食堂という、すばらしい活動だからと言って全員が善人の話にしたくなかったんです。各人が自分の中にどこか後ろめたい部分があったり、決断できない部分があったり、そうやって生きてるのが・・・私自身がそうだから、なんですけれど、迷いながら生きている人間たちがどうしていくか、というふうにしたかったんです。そういうことを脚本の足立さんが描くのがとっても上手で そういう人間の描写にしてくれたんです、子どもたちが純真ではないんです。そういう純粋な気持ちはもちろんあるんだけど、嫌な面も持っている、というところが、いじめられっ子が出てくる、というのがそういうところのあらわれでもあるんですけど。

神父：ユウト君がそのいじめを止められない自分とか共感する人も多いのではないですかね。

監督：いじめはよくないと思いながら、誰しも思っていると思うんですが、じゃ、それをすぐ止められるかということと実際は止められない。それは大人も同じ、いじめということでないにしても大人も同じこと

がありますし。

神父：大人も同じことがあるというか、映画の中にも出てくるように大人が見て見ぬふりをするから子どももやっぱりそれを真似して一步踏み出せないでいるという、その大人と子どもの関係性みたいなものがすごく胸に刺さりました。つまりやっぱり大人が純真かどうかはともかくとして、やるべきことをやっていないと子どもたちだって動けないし、逆にその子どもたちの方にしがらみのないまっすぐな何ものかの力が秘められている。そこに大人たちも信頼して学ぶ。僕はそういう意味でいうと、映画の中で子どもたちが 例えば虹の雲を探しに出かけて行くとか、また伊豆のホテルに親の金握って出かけるとか、観客目線からすると、いやいやそんなちょっと現実離れしているとか そんなことあるのとか見られがちなところをまっすぐ描いているところ、私はよいなと思ったんですよ。あれって言うのは子どもってやるじゃないですか？そういう恥ずかしいことだったり、突拍子もないことだったり、僕がこの映画見ていると、その子どもの頃の、助けてあげたいと思う、バランスの悪い何かをやってしまうとか、大人だったらそれやるわけないでしょう、というようなところに。でもいるかも。盛り上がって飛んで行っちゃうとか、自分も子どもの頃そうだったよな。すごく思い出させられて、普通ここ描くかなあ、この監督やっぱりそういう子どものことよく見ているなあ、と思いながら映画見ていたのを思い出したんですけど。

監督：そう言っただけだととても嬉しく思います。確かにそういうことはないだろうとか、ちょっと甘く描いているんじゃないか、ファンタジー的要素が入っているんじゃないか、とかいう批判は ある面ではその通りだと思っているんです。

しかし、今 晴佐久神父がおっしゃってくださったように私は子どもの中にそういうことがあると思っていますね。それと同時にもうひとつは 映画はフィクションなのでリアリズムを超えたところとかほしいというのが私の中に、どうしてこの映画を作るんだ。もちろん子ども食堂がすばらしいものだしそういうなぜ子ども食堂が必要かという思いは描きたい、子どもたちがどういうふうに世界を見ているかも描きたいんですけど、フィクションである限りは、どうやって生きていくんだってということがないと。絶望で終わりたいくないというのが作る方であるんですよ。そこは賛否あってしょうがないと思うところなんですけど。

神父：やあ～よかったと思いますよ。私、ああいう子ども目線というか、子どもの心がないとああいうファンタジー、この感覚わかんないだろうな。観る人を何でしようかね、“選ぶ映画”とさえ思いました。特に大人になるとあの・ユウトの両親が話し合うじゃないですか。ああいう話になるわけですよ。ちょっと様子見た方がいいんじゃないかとか、もっと公の手を借りた方がいいんじゃないかとか、責任どうなるんだとか、そういうセリフがあったかどうか、そのようなことだったと思うんですけど。ありますよ、教会でなんか、こう会議していても、あるいは仲間内で路上の人助けようなんて話をしている、やっぱり怯むものがあるんですよ、大人になると。どこまで手出していいのやら、あるいはこれ責任どうなるだろう、それこそ食中毒になったらね、誰が責任とれるのか、そんなような話ってというのが大人は出てきますよね。でもまず、やってみようというか、まず関わろうというか、考えるより先にまず、ちゃんとその手を出して、関わりを持とうという瞬間って尊いじゃないですか？

さっきのカツの話じゃないですけど、そここのところを何でしょうね、背中を押してくれるような映画だったなと言う風に感じて、きっとこの監督もそういう人なんだろうなあ。つい手出して失敗してみちゃう？どうなんですか？（笑）

監督：あの～私はこの主人公ユウトそのものですね。

神父：そうでしょう。

監督：踏み出せない人間です

神父：あっ そうなの？

監督：迷って、迷って、グジグジしているっていう人間だというふうに思います。フィクションだから踏み出すようなユウトを描けたんですが。

神父：そういうタイプでこの映画1本撮るってなんかちょっとギャップが。グイグイやらないと映画撮れませんよね。なんかやっぱり社会ひとつ、こうひとつ訴ったえたいとか、語りかけたとか、熱い思いが・・・。

監督：はい、そういう熱い思いはあるんですけど どういうふうに出すかはいろいろあって、私はそれを大きく言うタイプではないんだと思います。

神父：観た人たちはみんな励まされたと思います。特定の宗教とは関わっておられないかと思えますけど、『善いサマリア人のたとえ』（注：ルカ福音書 10 章 30～37）ご存知ですか。あまりご存じないかと思えますけど。

監督：少し・・・聞いたことありますけど。

神父：私、映画の中で やっぱり、宗教やっているものは思っちゃいました。まあ ざっくり言うとイエス様が語ったたとえ話なんですけれど。エルサレム郊外で、強盗にあって半死半生で、半分死にかけているような一人のユダヤ人が倒れているという、荒れ野でね。そこをユダヤ人の立派な祭司が通りかかってくるけれども、関わっちゃいけないと思って、道の向こう側を通りすぎて行っちゃうんですよ。倒れているのに。その次に、レビ人というエリートですよ。割と偉い人がやってきて、でもまた道の向こう側を通っちゃうんですよ。そこにユダヤ人と仲の悪い一人のサマリア人が通って、そのサマリア人はそのユダヤ人を見ると近寄って介抱して、自分の口バに乗せて、近くの宿屋に連れて行って、そして宿屋の主人に介抱してくれてと、また帰りがけにお金払うからちゃんと面倒見てくれと頼むというたとえ話。イエス様がこの倒れていた人の隣人になったのは誰だと思いませんか？と聞く、そういうたとえ話ですよ。それはもちろん助けた人が隣人になれた。実際に救いを求めている人、お腹を空かしている子どもたち、本当に誰かに助けてもらわなければ生きていくことができない、そういう人、現実に大勢います。みんな、一人一人に何でしょうね、関わりたいんだけど、関われない。どうしても道の向こう側を通って行ってしまう。そういう現実がね、僕らの中にいつもあって、もっとやってあげたいんだけど、できない、というもどかしい気持ちで居続ける。映画の中にその子どもたちもそうだし、大人もそうだし、みんなが もうどうしたもんかね、と言っている時に、そこから一歩踏み出していく世界。

社会を今このコロナの時代にみんなが求めているわけだし、まあ神父はすぐに説教始めるんで、映画の話はさることながら、是非これを見ている人たちもまず映画を見ていただいて、このビデオ見ている人たちがいるわけですよ。カメラの前のあなたですよ。是非この映画を観ていただいて、そして、自分も一歩踏み出す、なんか助けてあげる、それができるんだ。そんな勇気を是非持ってもらえたらこの映画

賞、すごく大きな役割を果たすんじゃないのかなと・・・それだけは言いたかったので時間が来そうなので説教しちゃいました、是非『善いマリア人のたとえ』ルカ福音書に載ってますので皆さん、読んでみてください。

次回作とか、何か宣伝したいことがあれば監督どうぞ。

監督：はい、ちょうど2日前に新作が完成したところです。小さい規模ではあるんですけど日中合作映画で 去年の秋に全編中国で撮って、一人の役者以外全員中国人、ほんの一部を除いて全編中国語で出来上がった映画です。このコロナのことがなければ本来は2月に完成する予定だったんですが、先に中国がコロナの影響が出て、中国が日常に戻りつつあったら今度は日本がダメになって延びたんですけど、ようやく完成することができました。中国語で日本語読みしますと、安らかな魂と書いて「安魂」というタイトルなんですけれど、息子を亡くした父親の話です。死んだあと魂はどこへ行くんだろうか。父親が息子の死をどうやってとらえていくか、息子の死からどうやって生きていくか、ということを描いた映画で中国の小説家の原作でタイトル同じように「安魂」レクイエムという意味だそうです。という映画が完成したばかりです。まだコロナの影響が出ているので、本来は今年中国で上映して来年日本という予定でしたが、どれくらいずれるかが今ははっきり言えない状態になりました。こちらもまた別の観点から人間とは何か？もっとある面では宗教的なことに関わってくるかもしれません。という映画が出来上がったところです。

神父：息子を亡くした父親の気持ち、まさに全世界共通、普遍的気持ちであるわけですね。このコロナの時代にもう50万人亡くなったその時代に、その50万人にそれぞれ家族を亡くして辛い思いをしている人たちがいるという意味ではまさに普遍的テーマ。この時代にみんなで見てもらいたい作品かなと思いますので、日向寺監督の新作を是非応援していただきたいと思います。よろしく願いいたします。ちょうど30分最後に一言ありますか。

監督：このような賞をいただき、晴佐久神父のようなお言葉をいただいたことが何よりの励みになります。どうもありがとうございました。

神父：日向寺監督がこれからも、すばらしい作品を撮ってくださるように小さなお祈りを皆でしたいと思います。「父と子と聖霊のみ名によって アーメン。天の父よ、心から感謝して信頼してこの祈りを捧げます。あらゆる宗教を超えた真の親である神よ、私たちは信じています。苦しんでいる子どもたち、子どもを亡くして辛い思いをしている親、映画はそのような人間の大切な真実を私たちに表してくれる、すばらしい芸術です。天の父よ、日向寺監督とその作品を祝福して多くの人に感動と力をあたえるものとしてください。またこのコロナの時代を乗り越えて映画が一層人々にとってなくてはならない尊いメディアであることにみんなが気づくことができますように お願いいたします。私たちの主キリストによって アーメン。父と子と聖霊のみ名によってアーメン。」  
ありがとうございました。

監督：ありがとうございました。

以上